

## 初任者 1 年目を終えて

### —この一年で感じたこと、今後に向けてすべきこと—

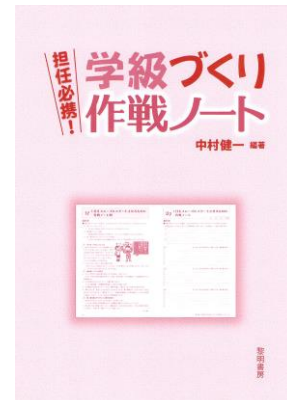
私は昨年3月に大学を卒業し、4月から小学校で教員としての第一歩を踏み出した。正直なところ、「私のようなペーパーがこのような通信を書いていいものなのか」と思ったが、こんな私だからこそ伝えられることがあると信じて原稿を書いている。この春に新採用となった先生や、同世代の若い先生に少しでも参考にしていただければ嬉しい。

4年生を担当することになり、まず私は本屋さんに向かった。何を教えればいいのか、どのようなことをしていけばいいのかといったことを知るために4年生学級担任向けの本が欲しかったからだ。何冊か本を買い、「なるほど!」と思ったのだが、ここからが私のしくじりである。読んで得た知識を「どのように」「どんな場面で」使うのかといった具体的なことを何1つ決めなかったのである。例えばこんなことがあった。給食時間のことである。昨年までの積み重ねのおかげで、私が指示をしなくてもスムーズに配膳が進み、給食を食べることができた。食べ終わった子どもがこのようなことを言ってきた。「先生、食器はどうやって片付けますか?」特にどうするかを考えていなかった私は、「去年はどうやってやってたの?」と子どもに聞き、その場でルールを決め、クラス全体に説明した。しばらくは問題がなかったのだが、少しずつ細かいところではこぼりがでてくる。子どもによって解釈の違うところがあったり、決め切れていない部分を見つけて好き勝手にやったり…などだんだんと落ち着かない給食時間になっていってしまった。この例だけではなく、授業や掃除、休み時間など同じように自分が想定していなくてその場で考えてしまったルールがいくつもあった。クラスにおける事前のルール決めを怠り、子どもに聞いてその場で考えてしまったことで「何も知らない先生」というイメージを与えてしまったのではないか。また、子どもに聞いてルールを決めたことで「自分たちが何かを言えば、思い通りにルールが作れる」と感じた子もいたかもしれないと今は思っている。

学校現場は、「超」具体的である。あらかじめ自分なりのルールを考えておくことが必要だ。しかし、大学を卒業したばかりの去年の自分がこんなことを急に言われたとしたら、何をどう考えたらいいのかわからなかっただろう。そこで、おすすめの書籍を紹介する。

中村健一著『担任必携! 学級づくり作戦ノート』

(黎明書房)



中村先生の学級づくりの考え方をもとに、自分なりの「作戦」を考え、書き込むことができる。「こんなことまで考えているのか」と驚かされるほど内容が具体的である。例えば、新学期1日目に子どもにポジティブな印象をもたせるために中村先生がしていることがある。

①子どもにインパクトを与えること。

教室に入る時に転んでみる、などのパフォーマンスで先生ってなんかすごいと思わせる。

②楽しい印象を与えること。

ゲームなどを行い、楽しい先生だと思わせる。また、ルール説明を通して先生の言うことを聞く体験を積み重ね、当たり前にする。

③子どもたち同士の距離を縮めること。

拍手をうまく使い、教室の空気を温めることでこの仲間となら楽しいクラスにできそうだなと思わせる。

このようにあらゆる策略を考え、実行しているのだそう。私も、この3月にこのノートを使って新年度をどのように過ごすのかを考えている。気になった方はぜひチェックしていただきたい。

その他に、自分が参考になった書籍をいくつか紹介しておくので参考にさせていただければと思う。

- ・向山洋一著『授業の腕をあげる法則』(明治図書)
- ・堀裕嗣著『学級経営 10 の原理 100 の原則』(学事出版)
- ・石川尚子著『増補 言葉ひとつで子どもが変わる』(柘植書房新社)
- ・伊藤幹哲著『算数授業のユニバーサルデザイン』(東洋館出版)